私と幼馴染の観察処分者

黒猫in軒下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私と幼馴染の観察処分者

【Ｎコード】
Ｎ４３６１Ｙ

【作者名】
黒猫ｉｎ軒下

【あらすじ】
吉井家の隣に住む少女宮野唯は明久の幼馴染。バカな明久やその友人たちに振り回されつつも学園生活を送っていきます。

プロフィール？（前書き）

趣味と暇つぶしを兼ねて書いた文です。感想などあればぜひ、お願いします。

プロフィール？

宮野唯（みやの ゆい）

身長１５４ｃｍで胸はＤ。

髪の色は薄紫で瞳は赤。

両親は物心つく前に離婚していて、母方の下で生活。
やや、ドジな所もあるものの本人は認めていない。
母は仕事で忙しいため家事もそれなりにできる。
吉井家とは隣で付き合いも長く、明久の両親に面倒を見てほしいとの頼みを受けているため合いカギを貸してもらっている。
かなりのゲーオタで買ったゲームは諦めないというポリシーをもっている。
エロの方向に対して耐性が微塵もなく保健体育の点数は１桁となっているが、それ以外の科目は一部を除き、Ｃクラスレベル。典型的な理数系で物理限定で４００点オーバー。文系はＦクラス程度。
振り分け試験の前日に母が倒れてしまい看病していたため、試験を受けていない。

召喚獣の装備はゲームやアニメのハマりすぎの為か、ガ〇ダムのビームサイズが武器。
腕輪の力でハイパージャマーを使用可能。

宮野波江（みやのなみえ）

唯の母。年は3ピー歳である。
唯が生まれて間もなく旦那と離婚しており、ほぼ女手一つで唯を育ててきた。
吉井家とは古くから交流があり、助けてもらったこともある。
ゲームなどにハマりすぎる娘を心配しつつも、温かい目で唯を見守っている。

第一話（前書き）

感想などあればぜひお願いします。

第一話

バカテスト　化学

調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料にえらんだところ調理を始めると問題が発生した。この時の問題点と代わりに用いるべき金属合金の例を一つ上げなさい。

姫路瑞希の答え
『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点。
合金の例・・・ジュラルミン』

教師のコメント
正解です。合金なので鉄では駄目だというひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え
『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント
そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え
『合金の例・・・未来合金（↑凄く強い）』

教師のコメント
凄く強いと言われても。

宮野唯の答え
『デプスライト鉱石』

教師のコメント
先生も集めるのに苦労しました。

「よし、お母さん、行ってくるね！」

「気をつけてね～」

お母さんに見送られながら、幼馴染で隣に住んでいる明君の家に向かう。
去年から大抵一緒に登校していたけど、どうやら今日は・・・寝坊してるみたい。新学年そうそう寝坊って・・・大方ゲームでもしてたんだろうな。

「明く～ん。寝坊だよ～（ドンドン）」

『・・・・・・グゥ・・・』

扉を叩いても反応がないどころかいびきまで・・・勝手に入るのは明君に悪いけど寝てる明君が悪いよね。

ドアを開けて部屋に入るとかなり散らかっていた。これじゃ足の踏み場もないよ・・・明君のベットに近づくと、何かを踏んで――

「きゃぁっ！？（ズルッ）」

思いっきり尻もちをついてしまう。ホントに足の踏み場がないよ・・・とりあえず踏んでしまったものを見ると、

↓エロ本

「いやあああああぁぁぁああ！！！！！（ブンッ）」

明君のエロ本だと解った瞬間無意識に持っていたそれを明君になげる。当然それは明君に飛んで行って――

ゴツッ

「いっだあぁぁぁ！？なになに！？なんなのさ！？しかも僕の参考書（エロ本）！？それと唯！？やばっ！これを速く隠して・・・」

「速くそんなの捨てて準備してぇーーー！」

「は、はいぃっ！」

あわただしく明君の朝が始まるのでした。

☆

「ほら、急いで明君！遅刻しちゃうよ！」

あれから5分後、私たちは文月学園に続く坂を走っている。もう10分切っちゃったし・・・

「ハァ、ハァ・・・砂糖が切れてるなんて最悪だよ・・・」

「最悪なのは明君の食生活と成績でしょ！・・・明君の料理美味しいのに・・・」

「唯、ここで僕を貶す！？それと唯が間違えて姉さんのセーラー服を出したのも原因だから！去年も同じようなことがあったきが・・・」

「・・・・・・」

そんな事実は確認されてないもん・・・
ただ、このやりとりの間に文月学園に到着できたから先生に挨拶をする。

「て・・・西村先生おはようございます」

「てつじ・・・おはようございます」

「おう、宮野と吉井か。おはよう。・・・お前たち鉄人っていいかけなかったか・・・」

「アハハ。気のせいですよ」

「む？ならいいが・・・」

あやうく鉄人って呼ぶところだったよ・・・

「ほれ、クラス分けの通知だ。・・・宮野、残念だったな」

「確かにFクラスは不安ですけど、お母さんの方が大事ですし」

実はお母さんが倒れたからその看病で振り分け試験を受けていない。
Fクラスは少し不安だけどお母さんが元気に回復したんだから後悔はしていないし、明君には悪いけど多分明君もFクラスだと思うし。

「そういえば波江さん大丈夫だった？まあ、僕はDクラスあたりに入ると思うから唯とはお別れだね」

その自信はどこからやってくるのかな？すると西村先生が急に話し始めた。

「吉井。今だから言うがな」

「？何ですか・・・なかなか開かないな」

「俺はお前を去年一年間見てきて『もしかすると、吉井はバカなんじゃないか？』なんて疑いを抱いていたんだ」

「それは大いなる間違いですね。そんな誤解をしているようじゃ、『節穴』なんてあだ名をつけられちゃいますよ？」

そういえば振り分け試験は上手くいったみたいなことを言ってたっけ。ストライカーシグマＶとか使ってなきゃ良いんだけど・・・

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気づいたよ」

「そう言ってもらえるとうれしいです」

明君は丁寧に開けるのを諦めて上の部分を破って、通知の紙を取り出した。

「喜べ吉井。お前への疑いは無くなった」

そこにはやっぱりＦの文字が大きく書かれていた。

第二話（前書き）

申し訳ありません！テストなどで忙しく…では、どうぞ。

第二話

バカテスト　国語

問　以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』

『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

『（1）弘法も筆の誤り』

『（2）泣きっ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え
『（2）泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント
君は鬼ですか。

宮野唯の答え
『（2）踏んだり蹴ったり（この前明君が小銭を落として屈んだときに車に水を思いっきり撥ねられた）』

教師のコメント
吉井君には悪いですが体験談で覚えれたようで良かったですね。

「……なんだろう、このバカでかい教室は」

「ここまで凄いと逆にFクラスが心配だよ・・・」

去年は全くと言っていいほど来たことのない三階に行くと目に入ったのは並みの五倍はあるんじゃないかって思うほど大きな教室だった。大きな窓から中を覗いてみるとみると、眼鏡をかけてスーツを

着こなしたいかにも「知的！」な感じの先生がいた。…ん？

「これ遅刻してるよね！？明君、走るよ！」

「これがＡクラスかぁ。え？……先生がいるってことは…わあぁぁ！」

思わず教室に見とれてしまっていたけど、先生がいるってことはほぼ遅刻だということ。せめてこれ以上遅れないようにＦクラスがある旧校舎へダッシュ。朝から続けてのこれは大変…！走っている間にＦクラスの教室前にやっと到着。

「ふぅ～。やっと着いた――――って言っていいのかな…？」

「私たち異世界に来たっけ？」

とても教室と認めたくない外観の教室（？）に着いたのは良いんだけど…ここはやっぱりＦクラスなんだね…クラスが書いてある木のプレートなんて今にも落ちそうだし。

「…ここにいてもしょうがないから入ろっか」

「う、うん」

教室についてはともかく、一応遅れてるから謝りつつ入る。

「すいません。遅れちゃいました…」

「早く座れウジ虫や――――ハッ！？唯か！？」

「雄二君！？Ｆクラスだったん――違う！私悪いことした！？」
待っていたのはゴリ…去年のクラスメイトであり、男友達の雄二君の罵声。恨まれるようなことをした覚えは無いんだけど…
「ち、違うぞ！これは明久にだな」
「美少女に罵声を浴びせるとは…死刑！」
「「「死刑！」」」
「ちょ、待て、お前ら！ギャアアア！！！」

あっという間に覆面集団に飛びかかられて集団リンチにあう雄二君。
というかクラスの大半にボコボコにされてる…
「どうしたの唯？」
すると遅れながら明君が教室の中に。
「え～っと、実はかくかくしかじかで」
「唯！悪かった！謝るから助けてくれ！明久も頼む、助けてくれ！」
「ふむふむ。…くたばれ雄二ぃぃっ！」

「ギャアアア！！！」

説明を聞き終えた明君は雄二君を助けることなく、むしろ攻撃を始めた。というかさっき貶そうとした明君に助けを求めるって…雄二君の思考回路はいまだに読めない。

「すいません。ちょっと通してもらえますかね？」

クラスの皆が雄二君に制裁を加えていると、覇気のない声が響いてきた。

振り向くと、失礼だけどいかにもさえない感じのオジサンが立っていた。どうみても生徒には見えないから多分このクラスの担任なんだろうなぁ。とにかく近くの席（？）というか床に座る。

「おはようございます。二ーFの担任の福原慎です。よろしくお願いします」

福原先生は薄汚い黒板に名前を書こうとしてやめた。チョークすら用意されてないってここは学校なのかな・・・

「皆さん全員卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出てください」

これに不備が無いと言い切る人はまともじゃないよね。畳とかを新調したら良い教室になる気がするんだけどなぁ。

「せんせー、俺の座布団に綿が殆ど入ってないです」

「あー、はい。我慢してください」

「先生。窓ガラスが割れてて風が寒いんですけど」

「わかりました。あとでビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

どうやらこの学園は意地でも状況を変えるつもりが無いみたい。と言うかこのやりとりって必要だったの？呆けていると隣の明君の卓袱台の脚が折れた。

「せんせー。僕の卓袱台の脚が折れたんですけど」

「我慢してください」

「無理だっての！！」

流石に無理がすぎるような…

「はっはっは。冗談ですよ」

良かったぁ。流石にこれは変えてもら――――

「木工用ボンドが支給されていますので後で自分で直しておいてください」

…お母さん。私は転校したくなってきたよ…

学年の底辺のＦクラスは厳しかった。

第三話（前書き）

感想などいただければ幸いです。

第三話

バカテスト　英語

問　次の英文を訳しなさい。

Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｂｏｏｋｓｈｅｌｆ　ｔｈａｔ　ｍｙ　ｇｒａｎｄｍｏｔｈｅｒ　ｈａｄ　ｕｓｅｄ　ｒｅｇｕｌａｒｌｙ.

姫路瑞希の答え

「これは私の母が愛用していた本棚です」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはＴｈｉｓだけですか。

吉井明久の答え

「☆●？▽〜♪＊×」

教師のコメント
出来れば地球上の言語で。

「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします」
設備の確認（？）を終えて次は自己紹介が始まった。先生の指名を受けて廊下側の人が立ち上がる。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

んん？誰かと思ったら秀吉君だ。去年から遊んだりしてるから一応男の子だって理解してるけど…第三者の目で見ると女の子にしか見えないなぁ。男の子なのにヘアピン使ってるし。

「ーーーと、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

微笑みを作って自己紹介を終える秀吉君。明君を見ると、見とれたような表情になった後に「秀吉は男。秀吉は男…」とブツブツ呟いていた。…秀吉君、油断ならないね。

「……土屋康太」

すると、次はまたもや友人のムッ君の番だった。去年からこの四人

とは遊んだりしてたけど皆Fクラスって…何でこんなに友達が集まるんだろ。それにしても女の子がいないよねぇ。ひょっとして女の子って私一人なんじゃないかな？

「島田美波です。海外育ちで、日本語は読み書きはまだ苦手です」

そんなことを考えてると美波ちゃんが自己紹介をしていた。

「良かった…。一人は女の子がいて良かったぁ」

流石に一人じゃやっていけないと思うから助かったよ。

「あ、でもドイツ生まれなので英語も苦手です。趣味は吉井明久を殴ることです☆」

「…あぅ。し、島田さん」

前言撤回。去年から思ってたけど明君の敵以外の何物でもなかった。明君も蛇に睨まれた蛙よろしく身を縮こまらせていた。

「美波ちゃん。一応言っておくけど明君はサンドバックじゃないからね…？」

「わ、解ってるわよ。ジョークってやつよ…」

正直そんなジョークは面白くないよ・・・それと美波ちゃんに足りないのは日本語力dけじゃ無いはず。

美波ちゃんの番が終わると流石に友人のオンパレードが終わって、男の人の自己紹介が延々と続くと明君の番になると明君はおどけた声で自己紹介を始めた。

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って読んでくださいね♪」

「「「ダァァーーリィーーン！！」」」

「だ、ダーリン…／／／」

野太い声の大合唱。というかこのクラスでその自己紹介は間違ってるんじゃないかな？多分私の声は聞かれてないよね…／／／結構恥ずかしいや。

明君の番も終わって男の子の自己紹介がまた続いていく。明君も少し眠たそうな顔をしてきたころに突然教室のドアが開いて、息を切らせて胸に手を当てている女の子がやってきた。

「あの、遅れてすいま、せん……」

「「「えっ？」」」

思わず私も含めて教室から驚きの声が上がる。それもこのクラスには絶対に来るはずのない姫路さんだったのだから。唖然としていると福原先生が姫路さんに話しかけた。

「丁度良かったですね。折角ですし姫路さんも自己紹介をお願いし

ます」

「は、はい！姫路瑞希といいます。よ、宜しくお願いします……」

「はい！質問です！なんでここにいるんですか？」

小柄な体を縮こまらせて自己紹介をする姫路さん。そこに一人の生徒から質問が飛んでくる。それも活字で見るとしたらかなり無粋な。悪気があったわけじゃないよね？でもそれも当然で姫路さんは常にテストの結果は5本の指に入るくらい凄いんだから当たり前だよね。

「そ、その…振り分け試験の最中に熱を出してしまいまして…」

その答えを聞いてクラス全体から「ああ…なる程」といった反応が返ってくる。私はそもそも試験を受けてないけど姫路さんは途中退席になったせいでFクラスってことかぁ。でも結構理不尽だよね？

「そういえば俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ。化学だろ？あれは難しかったな」

「俺は弟が交通事故に遭ったと聞いて実力を出せなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の嘘をありがとう。そして、兆が一そうなったら殺す！」

「低っ！異様に確立低っ！」

おバカさんの巣窟でした。

「で、ではっ、一年間宜しくお願いしますっ！」

そう言って自己紹介を終わらせて明君と雄二君の席の間にすわる姫路さん。明君も隣に座った姫路さんに声をかけようとすると、

「あの、姫路さ――――」

「姫路」

かぶせられる様にかけられた雄二君の声。多分今のわざとだよね？

「は、はいっ。何ですか？え～っと…」

「坂本だ。坂本雄二。宜しく頼む」

「あ、はい宜しくお願いします」

わざわざ深々と頭を下げる姫路さん。育ちがいいのかな？あ、そういえば。

「そういえばさ、姫路さ――――堅苦しいから瑞希ちゃんでもいいかな？私は宮野唯だよ。よろしくね」

「あ、はい。構いませんよ」

「良かったぁ。それで風邪は大丈夫なの？」

「あ、それは僕も気になる」

ようやく明君が会話に登場。

「よ、吉井君！？」

明君に気付いて声が上がる瑞希ちゃん。これは明君に…

「姫路。明久がバカでブサイクですまん」

え？ゴリラみたいな雄二君に言われるセリフじゃないよね？

「何言ってるのさ雄二君！ゴリラみたいなくせに！」

「おうふっ」

「そうですっ。目もパッチリしてますし、顔のラインも細くてきれいだし、全然ブサイクじゃありません！その、むしろ…」

これは…明君ってモテてるの！？明君は私が貰いたいのに／／／雄二君がダメージを受けてるけど気にしない。

「ぐ、う…まあそう言われてみれば見てくれは悪くは無いのかもしれないな。そういえば他にも明久に興味を持っているヤツがいた気もするしな」

「え？それは誰――――」

「「それって誰なの！？（なんですかっ！？」」

それは一体…

「確か久保利光だったかな」

久保利光→♂（性別／オス）

「……」

これは良かったって思えばいいのかな…ただ危険な香りもしてくるんだけど…

「おい明久。声を殺してめざめざと泣くな」

明君は両手をついて泣いていた。だっ、大丈夫！明君は私が貰ってあげるから！

「半分冗談だ。安心しろ」

「え？残り半分は？」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

「あ。はい。もうすっかり平気です！」

「ねぇ雄二！残りの半分は！？」

「明君。知らない方がいいこともあるんだよ」

「唯に姫路さんまで！？一体なんなのさぁ！？」

「はいはい。そこの人たち、少し静かにしてくださいね？」

少し騒ぎすぎたのか、先生が供託を叩いて注意してきた。

「あ、すいませ――――」

バキィッ　バラバラバラ…

教卓がゴミのよう――――おっととこれはム●カ大佐のセリフだね。
それはさておき教卓が木くずとなってしまった。わざわざ学園長もこんなにボロボロのものを用意したね…

「え～……替えを用意してくるので少し待っていてください」

「あ、あはは…」

瑞希ちゃんも苦笑いをしていた。
ここまで酷いとそうなっちゃうよね。明君は何か考え込んでいた。
考えがまとまったのか雄二君に声をかける。

「…雄二。ちょっといい？」

「ん？なんだ？」

「ちょっとね。廊下でいいかな」

「別に構わんが」

二人揃って廊下に出て行ったけど先生が戻ってくるまでに間に合うのかな？

明久ｓｉｄｅ

「ねえ雄二。この教室は酷くない？」

言うまでもなくこの教室とはＦクラスのこと。

「ああ。想像以上に酷いものだな」

「雄二もそう思うよね？」

「もちろんだ」

「Ａクラスの設備は見た？」

「ああ、凄かったな。あんな教室は見たことも無い」

あまりじっくり見れなかったけど見えた範囲でも黒板代わりにプラズマディスプレイやら冷蔵庫やら勉強には必要ないものが沢山で、一方でチョークすらないひび割れた黒板に綿がたいして入ってない座布団なんだから不満のない人なんていないだろう。

「そこでさ、試召戦争をやってみない？」

「戦争だと？」

「うん。相手はＡクラスに」

「…何が目的だ」

雄二の眼が細くなる。まあ警戒されて当たり前と言えば当たり前なんだけどね。ただここで本当のことを言うのも少し恥ずかしい。言い訳を考えていると雄二が思ってることに近いことを言ってきた。

「姫路の為、か？」

「う～ん…それもあるんだけどさ、姫路さんもだけど唯だって試験を受けたくなくて途中退席したり、うけてないわけじゃないでしょ？理不尽すぎる気がするんだよね。まあ、二人の為ってところかな」

「…まあ、そうだな。しかしお前に言われるまでもなく挑もうと思ってたからな」

「え？どうして？雄二だって全然勉強してないじゃないか」

雄二もＡクラスに挑もうと思ってたなんて意外だなぁ。

「世の中学力だけじゃないって、そんな証明をしてみたくてな」

「？？？」

「それに、Ａクラスに勝つための作戦も考えた――――っと。先生が戻ってきた。戻るぞ」

「あ、うん」

雄二に促されるまま教室に入るのだった。

唯ｓｉｄｅ

先生が替えの教卓をもって戻ってくるころに明君達も戻ってきた。
一体何の相談だったんだろう。
先生が戻ってきたので自己紹介が再開される。それ以降は特になにかが起こるわけでもなく雄二君の番がやってきた。

「坂本君。君が最後の一人ですよ」

「了解」

先生に呼ばれてゆっくりと立ち上がって教壇に歩み寄る雄二君にはいつもの態度とうってかわってクラス代表としての貫禄があった。

「Ｆクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは坂本でも、代表でも好きなように呼んでくれ」

別に代表と言っても学年全体からみればおバカさんの集まりの代表というだけで五十歩百歩というところだけど。

「さて、皆に一つ聞きたい」

間の取り方が上手いのか、皆の視線は雄二君に集まった。皆の様子を確認した後、雄二君の視線は教室の設備に移っていく。

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて私たちも雄二君の視線を追って備品を眺めて行った。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシート、挙句の果てには冷蔵庫と来たが――――不満はないか？」

「「「「大ありじゃぁっ！！」」」」

ま、そうだよね。

「だろ？俺だってこの状況は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そうだそうだ！」

「いくら学費が安いからってこれはあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費なんだ！あまりに差が大きすぎる！」

半分自分の成績が悪いのもあるけどあまりにひどい設備のせいか堰を切ったようにあがる不満の声。

「その意見はもっともだ。そこで」

皆の反応に満足したのか自信に充ち溢れた不敵な笑みを浮かべて、戦争の引き金を引いた。

「これは代表としての提案なんだが、Ｆクラスは Ａクラスに試召戦争を挑もうと思う」

あぁ、相談ってこれのことだったのかな？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4361y/

私と幼馴染の観察処分者

2011年11月27日11時46分発行